家庭医が街で屋台を引いたら：モバイル屋台による地域健康生成プロジェクト

Mobile Stalls Pulled by Family Physicians: A Community-based Salutogenic Project Using Mobile Stalls

孫 大輔¹⁾ 密山 要用¹⁾ 守本 陽一²⁾

Daisuke Son¹⁾, Toshichika Mitsuyama¹⁾, Yoichi Morimoto²⁾

要 旨

地域志向性ケアの一つのあり方として「モバイル屋台 de 健康カフェ」プロジェクトを紹介する。家庭医・医学生である筆者らは、東京の「谷根千」地域と、兵庫県豊岡市でモバイル屋台による健康生成的なダイアログを実践した。モバイル屋台は健康無関心層へのアプローチや多世代がつながる場として、「小規模多機能」な機能を発揮する可能性がある。

Abstract

We introduced the “Health Cafe with Mobile Stalls Project” as an example of community-oriented care. The authors, two family physicians and a medical student held salutogenic dialogues at mobile stalls in the “Yane-sen” area in Tokyo and Toyooka City in Hyogo Prefecture. Mobile stalls may be able to demonstrate “small scale multi-functional” roles to approach people who are indifferent to health, and serve as a place where multiple generations can connect.

Keywords : 地域志向性ケア (Community-Oriented Care), 健康生成論 (Salutogenesis), モバイル屋台 (Mobile Stalls), 健康カフェ (Health Cafe), ダイアログ (Dialogues)

1. はじめに

家庭医/総合診療医にとって、地域志向性ケアは必須の活動である。その際、地域住民とパートナーシップを形成し、ゆるいつながり(ソーシャルキャピタル)を強化することの重要性は強調されている。今回、我々は、家庭医や医学生が街で移動式屋台をひき、コーヒーなどをふるまいながら地域の人と健康生成的なコミュニケーションをとるという活動を実践した。この「モバイル屋台 de 健康カフェ」プロジェクトについて紹介し、その効果について考察してみたい。

2. 東京「谷根千」地域におけるモバイル屋台 de 健康カフェ

東京に「谷根千」と呼ばれる地域がある。台東区谷

中および文京区根津・千駄木にまたがる、住民により名付けられた地域である。孫および密山は、この谷根千地域を対象に、地域住民と医療系専門職・研究者の協働により地域の人々のウェルビーイング向上を目的とした「谷根千まちばの健康プロジェクト(まちけん)」を2016年より行っている¹⁾。ウェルビーイング(well-being)とは、Seligmanによれば「元気で活躍すること」であり²⁾、一般に、身体的、認知的、社会的、情緒的に良好な状態にあることを指す³⁾。この活動を行う中で、地域の方から「芸工展」という住民主催のイベントへの参加を招待された。そうして、移動式屋台によりケアの専門職と住民の対話の場を生み出すことを目的とした「モバイル屋台 de 健康カフェ」を2016年秋の「芸工展」に出展した。

1) 東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター医学教育学部門

2) 自治医科大学医学部

著者連絡先：孫 大輔 東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター医学教育学部門 [〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1] email: sondtky@gmail.com

(受付日：2018年3月5日、採用日：2018年3月23日)

©2018 日本プライマリ・ケア連合学会

屋台の活動は、屋台製作ワークショップと完成した屋台でコーヒーをふるまう活動に分けられる。屋台製作ワークショップでは、ケアの専門職の他に建築関係者をメンバーに巻き込み、街の路上で屋台を製作した。その様子に足をとめる地元住民や外国人観光客との偶発的な会話が起こり、また地域の子供たちの製作活動への能動的な参加もあり、屋台製作という作業を通じて多世代にわたる関わりが生まれた（図1）。

屋台完成後は、地域活動に関心をもった家庭医やコミュニティナース⁴⁾、医療系学生らが、約2週間の祭りの開催期間を通して代わる代わる屋台をひき、谷根千

図1 東京「谷根千」地域でのモバイル屋台 de 健康カフェ

の各地を巡り、出会った人々にコーヒーをふるまいながら対話をするという活動を続けた。期間内にコミュニティナースが、モバイル屋台を訪れた人々の一部に実施した他記式アンケート調査の概要を表1に示す。期間内に会った計200人以上の中の15人であるため選択バイアスがあるものの、20代から80代まで多世代の人々が屋台に関わったことが分かる。「病院は特殊で、嫌いなので、なかなか行かない」という人や、健康について特に困っていないという人なども含め、すべての人が「まちの保健室」のような場があれば行きたい、という回答をした。公的機関以外に、気軽に健康などについて相談できる場、人のつながりが生まれる場を求めていることが分かった。

「屋台」という多くの人々の関心をひく仕掛けを用い、街中を歩きまわること、偶発的なコミュニケーションが多く生まれた。健康に関心の高い人々だけではなく、普段は病院に来ることのないさまざまな住民と対話する機会が生まれた。対話の内容も屋台の思い出話や個人的な身の上話、谷根千地域の歴史、そして健康や病気に関する話と多岐にわたっていた。

3. 兵庫県豊岡市におけるモバイル屋台プロジェクト

兵庫県豊岡市で、医療系学生を中心とした健康プロ

表1 コミュニティナースによるアンケート調査（2016年のモバイル屋台 de 健康カフェにて）

ID	年齢	性別	同居家族	健康についての困りごと	「まちの保健室」があったら行きたい？
1	30代	男性	一人暮らし	視力矯正の不具合。	行きたい。公的機関と別のものがほしい。
2	40代	女性	同居者あり	特にない。	行きたい。
3	20代	女性	一人暮らし	腰が痛い。寝られない。	行きたい。病院は特殊で、嫌いなので、なかなか行かない。
4	60代	女性	同居者あり	高血圧。健診に行くと不必要な治療をされないか心配。	行きたい。気軽に自分のことを話したい。
5	60代	男性	同居者あり	全力で動けない。パワー不足。	行きたい。自分でも体操の会をやっている。
6	60代	男性	同居者あり	不整脈が気になる。	行きたい。まちに保健室があれば人が集まる場所となる。
7	60代	男性	同居者あり	関節が痛い。	行きたい。面白い。
8	50代	女性	一人暮らし	更年期の症状。	行きたい。安心感を支えると思うし、そこをきっかけにつながりが生まれると思う。
9	20代	男性	一人暮らし	尿酸値が高い。	行きたい。人のつながりを作ることができる。病気の予防につながる。
10	60代	女性	同居者あり	体力の低下。仕事がしたい。	行きたい。地域のつながりが良くなる。
11	50代	女性	同居者あり	体力の低下。処理能力の低下。	行きたい。健康の支えになると思う。
12	80代	女性	同居者あり	老眼。	行きたい。入りやすい場を作してほしい。
13	80代	女性	一人暮らし	訪問看護がときどき家に来るが、必要性が分からない。	行きたい。
14	50代	女性	同居者あり	最近、骨をよく折る。	行きたい。以前、不眠症から「薬漬け」にされたことあり、相談できる場所がほしい。
15	20代	女性	不明	ダイエット何度か経験あり、内臓が心配。	行きたい。婦人科系の悩みなど、普段相談できる人がほしい。

プロジェクト「但馬ゆかりの医療系学生の集い」を行ってきた守本は、無関心期の住民への健康介入が困難であるという課題を感じていた。そのような折、2016年秋に東京・谷根千での「モバイル屋台 de 健康カフェ」プロジェクトに学生の立場で参加し、地域住民と医療者のカジュアルな関係性に感銘を受け、豊岡市においても「モバイル屋台 de 健康カフェ in 豊岡」を行った。

屋台製作ワークショップは地域の拠点である映画館

図2 兵庫県豊岡市でのモバイル屋台 de 健康カフェ

豊岡劇場前の駐車スペースで行い、通りかかる方々と一緒に製作した。屋台の側面には交流のための黒板を設置した。

屋台を用いた活動では、医師、看護師、医学生、看護学生等で屋台をひいて、街中でコーヒーをふるまい、健康診断未受診者や医療から疎遠な学生など、多くの年代の住民との対話をすることができた（図2）。

スタッフの振り返りからは、医療者の学びとして、「地域を知ることができた」「医療から疎遠な人と出会えた」「医療者同士がつながる場だった」などが挙げられた。モバイル屋台を用いた活動は、住民への健康相談機能に加え、地域住民と医療をつなげる機能、医療者同士をつなげる機能といった「小規模多機能」な役割があると考えられた。

4. モバイル屋台による健康生成ダイアログ

屋台を起点として発生したコミュニケーションは「健康生成的なダイアログ（対話）」と言える。そこでは、問題に焦点を当てたアプローチではなく、屋台に関心を持った街ゆく人と医療者がゆるくつながり、世間話の延長で健康をめぐる対話が偶発的に発生して

表2 モバイル屋台をめぐる発生したダイアログの例

日時	場所	フィールドノートからの抜粋
2016年10月10日	文京区根津	屋台を見て話しかけてきたMさんという男性。「屋台を医療従事者がひいて健康話にのってコンセプトいいですね！」と、賛同してください。この辺に住んでいるという。また、カフェに入ろうとしたベビーカーに幼児を乗せた若い夫婦と話をする。……やはり、モバイル屋台で、地域の健康づくりをしているという話をすると、大変関心を示してくださった。「面白いことやってますね」と。
2016年10月12日	台東区谷中	朝日湯（銭湯）の前に来た。ここで一旦停泊しようということになる。お風呂に入っていくお客さんに「珈琲飲めますよ～」などと声をかけると、興味を持つ人が少しずつ出てくる。ちょっと立ち止まる人も増えてきた。地元の方という白髪まじりの60～70代の女性。「これなあに？あー、芸展の企画でやってるの？」と、興味深げな顔で立ち止まってくれる。今日、実質的に最初のお客さんだ。珈琲をまずはさしあげる。「今日はお坊さんと医者です」と説明すると、さらに驚かれる。Yさんと仏教の話で盛り上がっているようだ。そうこうするうちに、他の方もどんどん立ち止まるようになる。
2016年10月15日	台東区谷中～ 文京区根津	谷中の通りを歩いていると、オランダ人の女性が話しかけてきた。「これは何をしているの？」と聞くのでコンセプトを説明すると、建築と都市デザインの大学の先生だったらしく、とても興味を持ってもらった。「面白いことしてるね」と。珈琲も飲んでもらい、一緒に記念撮影。さらに、藍染大通りに行くまでに、若い大学生の女子2人、おばあちゃん1人にも珈琲をふるまう。最初に「なんだこの屋台？」と不思議な顔で見ていた人たちも、「珈琲のめしますよ」と声をかけると、立ち止まり、中には説明するとモバイル屋台のコンセプトを理解してくれて、共感してくれる人がいるのは嬉しい。
2016年10月16日	台東区谷中	谷中に住んでいる地元のおさん夫婦とその子供たちもモバイル屋台に立ち寄ってくれた。Iさんが言う。「やっぱりこれいいですね。特に無料で珈琲をふるまうのがいいよ。これはやっぱり無料でなくっちゃ。こういう風に人が集える場所、居場所を作っているのがすごくいいと思う」との言葉をいただき、本当に感動する。うれしい。
2016年10月18日	文京区根津	自転車にのった地元のおっちゃんたちが話しかけてくる。「これ自分たちで作ったの？すごいねえ」と、やたら陽気だ。あとで聞いたところ、根津町会の人たちのようだ。根津生まれで、今回自身も芸展に出しているMさんが立ち寄ってくれる。さっきのおっちゃんが「おう、Mちゃん」と声をかけている。

いた。健康生成論(salutogenesis)とは、人の健康は健康要因(salutary factors)に支えられているとする考え方で⁵⁾、ウェルビーイングの概念とも関連がある。また、モバイル屋台による活動では、いわゆる「健康無関心層」の人々とつながりやすくなったり、多世代が交流しやすくなったりする。

モバイル屋台をめぐって発生したダイアローグの例をいくつか、フィールドノートから抜粋する形で紹介する(表2)。いずれも会話のきっかけは、健康ではなく、屋台に対する興味や、コーヒーを飲むという日常性から発生しているのが分かる。そこから疾病中心ではない、健康あるいはウェルビーイングをめぐってのダイアローグが発生しているのが見て取れる。

こうした多面的な作用を持つモバイル屋台の強みを一言で表すならば、「小規模多機能性」であろう。「屋台」という装置が、コミュニケーションの磁場となり、日常会話が発生するとともに、健康をめぐるダイアローグが生まれ、またコーヒーを飲みながらリラックスできる場所ともなる。子供たちにとっては遊び道具となり、大人たちにとっては憩いの場となるのである。こうした「小規模多機能」な場は、昔ながらの「銭湯」や「路地」が地域においてそうした機能を果たしてきたが、それらが徐々に失われていく中で、今後「モバイル屋台」のような代替的な場がいよいよ必要性を増してくるであろう。

謝 辞

今回、モバイル屋台 de 健康カフェの活動に協力して下さり、アンケート調査のデータを共有して下さいったコミュニティナースの小原恵美氏、香本なぎさ氏、宮本裕司氏、平塚良子氏に心より感謝申し上げます。

利益相反

筆頭著者および共同著者に、本研究に関して開示すべき利益相反は無い。

文 献

- 1) 孫大輔. まちけんー谷根千まちばの健康プロジェクト. 東京: 谷根千まちばの健康プロジェクト (まちけん); 12 March 2018. [not revised; cited 14 March 2018]. Available from: <http://www.ynsmachiken.net>
- 2) Seligman MEP. Flourish: A Visionary New Understanding of Happiness and Well-being. New York: Simon and Schuster; 2011.
- 3) Bornstein MH, Davidson L, Keyes CL, et al. Well-being: Positive Development Across the Life Course. Psychology Press; 2003.
- 4) 矢田明子. コミュニティナースとは. 島根: Community Nurse Company (株); 10 March 2018. [not revised; cited 14 March 2018]. Available from: <http://community-nurse.jp/cn>
- 5) アーロン・アントノフスキー. 健康の謎を解く: ストレス対処と健康保持のメカニズム. 第1版. 山崎喜比古, 吉井清子訳. 東京: 有信堂高文社; 2001. 3-18.